

地域学習における高大連携授業の意義について

—麗澤大学と沖縄県立八重山商工高校の連携活動

山川和彦・城間さおり

1. はじめに

本稿は、麗澤大学と沖縄県立八重山商工高等学校(所在地石垣市、以下、八重山商工とする)との高大連携協定締結5年を契機に、今までの活動を振り返り、その内容と意義を整理、確認し、今後の連携活動のありかたについて展望するものである。

高大連携については、文部科学省の報告書¹、川合(2018)に簡潔にまとめている。それによれば、多様な学習歴を持つ生徒が増加する中で、生徒一人一人の能力を伸ばすために、高校生が大学の授業に参加することが高大連携活動の前提とされている。確かに教育の段階的発展という見方では、高校生が自身の興味、関心にしがって大学で専門的教育に触れる機会を得ると言うことになる。しかし、高校生と大学生のインターアクションが加わった場合は、学びは高校から大学という一方向ではなく、双方向になる。さらに、科目等履修生、出張講義のような高校大学間の制度的連携ではなく、高校、大学双方の教員の担当授業の中で学生交流や、大学生の学外活動の中で高校を訪問することもありうる。

そして連携授業のありかたも教室での講義だけではなく、ワークショップやフィールドワーク、コロナの影響で登場したオンラインを活用した交流も実施できる。連携の意義も、生活圏に大学や専門学校がない地域では、高校生にとってまず大学の存在を身近に感じてもらうことが重要となる。一方、大学生にとっては、地域特性を反映した多様な高校教育を通して、観光ではない地域の学びに発展させることも可能である。

このような高大連携の多様な形がある中で、本学と八重山商工の連携がどのように行われているか、その成果や課題を考察して行きたい。

2. 麗澤大学と八重山商工との連携活動の経緯

はじめに八重山商工の学校説明を簡単におきたい²。八重山商工は昭和41年(1966年)琉球政府立八重山商工高等学校として設立認可され、八重山地区における商業及び工業教育の基幹校として開校した。現在、工業系の機械電気科(機械コース・電気コース)、情報技術科、商業系の商業科(会計システムコース・情報ビジネスコース・観光コース)で編成され、「友愛津梁」を校訓とし、産業及び文化の進展に貢献し得る国際感覚を備えた教養豊かな人材育成に努める高校である。

石垣島には主に台湾からのクルーズ船が入港し、台湾人観光客が島内観光をしている事情もあって、八重山商工では中国語教育が熱心に行われている。中国語検定試験や中国語レシテーションコンテストでは優秀な成績を残している。そして商業科の中の観光コースは、伝統芸能の学びやダイビング実習も取り入れられている。

次に連携の経緯を示す。連携を始める契機となったのは、2014年5月、山川が科研費調査で八重山商工を訪問し、観光コースでの中国語学習事情を聞き取りしたことである。当時、観光コースの担当教諭との話の中で、学生の交流の話が進むことになった。2014年10月には山川ゼミの有志4人が石垣を訪問し、ビーチクリーン活動「海Loveフェスタ」に参加、その際、八重山商工の生徒とも交流活動を行っている。以後、石垣島で始めたホテルインターンシップ³に参加した学生が、高校を訪問し、高校生との交流活動や共同して授業を行う活動を実施することになる。

石垣島での学生のインターンシップ、八重山商工での交流活動が定期的に行える機運が整ってきたことから、麗澤大学では、山川が中心となって学事部(当時)

¹ 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「報告書 一人一人の個性を伸ばす教育を目指して」2007年 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/07032207.htm (2022年12月6日閲覧)

² <http://www.yaeyama-th.open.ed.jp/post-9.html> (2022年12月6日閲覧)

³ 山川は2016年から石垣島のホテルでのインターンシップを企画し、学生を派遣している。その成果などは山川(2018)参照。

と協議しながら学内調整を行い、石垣市との包括協定⁴を結ぶことになった。日付は石垣市との協定に先立つ2017年1月18日、麗澤大学と八重山商工は、「沖縄県立八重山商工高等学校と麗澤大学との連携教育に関する協定書」を締結し、「観光人材育成の視点から高校と大学双方の教育の一層の向上を図ることを目的」（第一条）とした。「大学による高校への出張講義、高校の国際理解教育に関する連携」が協力事項として明文化され、これにより、それまでの担当教員間の活動であった交流授業が、協定に基づく公的なものとなり、今日に至っている。

なお、八重山商工では中国語が正規カリキュラムにあることから、一時、外国語学部中国語専攻への指定校推薦とした経緯もある。

3. 交流活動の発展と事例

連携の経緯は前章で述べてきたようであるが、この章では具体的な活動事例を紹介していく。活動は大きく4期に分けられる。すなわち交流段階、出張講義・ワークショップ、共同フィールドワーク、オンラインによる活動である。当初の交流段階では、先に述べたように山川のゼミ生やインターンシップ⁵の際に行われたアドホックな交流で、高校生にとっては大学の学びや留学に関する情報を得ること、そして大学生にとっては離島での学びを知ること、現地情報に詳しい高校生との歓談という意味合いである。それが授業内での活動へと発展し、さらに、高校生と大学生がチームを組んで野外実習を行うなど、高校生と大学生と協働を求める活動に発展した。その後コロナ禍においては、対面授業ができない中で、オンラインによる交流活動が行われるが、それだけではなく、高校生の活動に対する大学生の支援、あるいは大学生のゼミ活動に高校生がアンケート協力するような関係性構築に展開していく。

3.1 出張講義形式のワークショップ

アドホックな交流から発展し、いわゆる出張講義形式でワークショップが3回行われた。高校からは、「外国語学習の敷居を下げる」、「進路意識を持たせる」⁶ことが一貫して求められてきた。それに対し、普段から外国語、外国人教員に接している麗澤生が仲介的な役割を演じた。麗澤の教員は、山川の直接的な声がけで協力をしてもらった。

1) 2016年9月「知らない言葉でメッセージづくり」、「石垣島のオススメ」クイズ

外国語学部の草本晶准教授(当時)とインターンシップ終了後石垣に残ってもらった学生4人に協力してもらい授業を行った。1コマ目は、日本語訳付きのドイツ語の文章を分析して、相手に伝わるようなメッセージを考える。知らない言葉でも思い切って使ってみれば、相手に伝わるかもしれないと気づかせる試みである。この活動はNHKの取材を受け、九州沖縄のニュースの中で放映されている。続いて、2コマ目は、生徒がそれぞれ石垣島のオススメと思う場所、食べ物、お土産、アクティビティを英語で紹介する活動で、高校生がわからない英語表現を大学生が支援することになった。

この活動に参加した学生は、普段は英語を学習している立場であるが、生徒の質問に対して英語を教えるという視点での学びがあったと感想を述べている。筆者が観察するに、高校生が知っている英語表現を活用できる「やさしい英語」をどう教えるかという技量である。また、中国人留学生(大学院)も中国語を学習している生徒と会話をすることを通じて、学習歴が短い高校生の意欲的な学びに驚いたと述べている。

2) 「私だけの八重山商工」、「高校生の一人歩き in Taipei」

前年に引き続き、2017年2月、経済学部山下美樹教授に協力を仰ぎ、出張講義のワークショップを行った。参加した大学生はインターン中の4人(うち一名はドイツ人留学生)であった。高校1年生には八重山商工を紹介する活動を、2年生は台湾へ修学旅行に行くことから、現地での行動を想定しながら、どのような場面があるか、問題解決、達成手段としての言語の学びを意識した活動を行った。内容的には、KJ法やロールプレイングを利用して、一人歩きで遭遇すると思われること、その対処としての言語的、非言語的解決方法などを大学生とグループを組んで高校生に考えさせたり、発話させたりするものである。

3) 2018年2月「《八重山商工》高校生の台湾歩き」

高校生が行く台湾修学旅行の旅程をもとに、現地に到着してから遭遇する場面をイメージしながら、異なる文化、言語圏での行動力をつけるシュミレーションゲームを行った。麗澤大からは中国語専攻の邱瑋琪准教授、淡江大学からの留学生、中国語専攻の学生3人が参加した。なお、翌日には、市街地で外国人にイン

⁴ 2017年2月20日に締結し、その目的は「包括的な連携のもとに、広範な分野で知的・人的・物的資源を相互に活用し、地域社会の持続的発展に寄与すること」としている。締結時には、中山理學長(当時)、今村稔学事部長(当時)が出席した。

⁵ インターンシップのシフトを融通してもらったり、インターンシップ終了後に高校の活動に参加してもらったりする方法を取った。参加者は希望者のみで2~4名程度である。

⁶ 沖縄県石垣市には、大学及び専門学校がないため、大学生に接する機会がないとのことである。

タビューする実習を行った（次節）。

このほかに、いわゆる出張講義形式で、山川がユニバーサルツーリズムに関する講義を行っている。

3.2 高校生・大学生の共同フィールドワーク

八重山商工の観光コースは、教室での授業以外に様々な実習を行っている。そこで担当教員との打ち合わせの中で、教室外でのフィールドワークを共同で行うことが議論された。学生はこれまでと同様にインターンシップを参加者が、活動にも関与してくれた。学外の活動となると高校側は授業カリキュラムの調整を行いながらの対応となった。

1) 「八重山離島めぐり」

「八重山諸島の離島を巡り、島の文化や魅力を再発見する」、「島に対する県外学生と地元高校生の目線や感覚の相違点や共通点を理解する」、「学生との交流を通し、進路に関する意識を高める」そして「チーム力を高める」ことを目的として、2017年9月11日にグループに分かれて小浜島、黒島、竹富島を訪問し、離島の自然や生活様式を学んだ。翌12日には西表島で、島の地区ごとのさしみ屋を調べる活動をした⁷。

教室と違い高校生と大学生がグループ活動をするので、チームワークがより求められる。実施に当たっては八重山商工の担当教諭と山川が数回による打ち合わせのあと、八重山商工の商業科の先生方の協力を得る形で実施した。高校生はこの活動をもとに教室での事後学習があったが、大学生はそのまま帰郷することになるので、大学生の学びの効果は不十分であった感がある。麗澤大からは邱瑋琪准教授、山川が参加、学生は2人であった⁸。

2) 「市街地でのインタビュー」

2018年2月に行った中国語講座に引きつづき、市街地で外国人旅行者に声がけをして、石垣の魅力インタビューする活動を行った。まず教室で質問項目を練って、ボードを作成し、その後市街地へ出て、通行する外国人にインタビューする活動である。麗澤大からは匂坂智子助教（当時）、中国語専攻の学生が参加した。この実習は次に示す9月に継続された。

3) 「YOUは何しに石垣へ～外国人目線の石垣をみよう」

2018年9月にも継続して高校生が外国人にインタビューする実習を行った。テレビ番組にヒントを得て、

高校生が外国人旅行者と思われる人に声がけをして、回答ボードにシールを張ってもらう活動である。教室で質問シートを作成し、その後、市街地で旅行者が多く利用する場所へ赴きインタビューを行う。インタビュー内容の一例は、「石垣牛を食べたか」、「滞在中、海か山へ行ったか」「何回石垣に来たか」「(写真を見せて)石垣で食べたものは」などの簡単なものである。邱瑋琪准教授、山川、麗澤大学大学院生・学生合計6名が参加した。大学生は高校生が質問する英語表現、および声がけのサポートをする。

参加した高校生へのアンケートによると、話しかけそのものよりも英語が通じるかの不安が高く、それを大学生がサポートしてくれたことに対する評価が高かった。大学生からは、アンケートをその後どう活用するのかも含めて活動全般を計画しておくとうよかったのではないかという感想があった。

4) 「カフェマップ」と「アイランダーサミット石垣」⁹

連携活動はすべてが順調に行えるとは限らない。ここでは協働計画を立てるも、連携できず、それぞれに単独活動になった事例を取り上げる。

2019年夏に、石垣島のカフェについて高校生と大学生が分担して調査をする計画を立案した。カフェの開店時期、オーナーの出身地などに加えて¹⁰、車いす対応のスロープやビーガンメニューの有無などを含めたユニバーサルツーリズムの観点からの調査である。大学生は車でないと行けないエリアを担当し、情報を高校生と共有することになっていたが、高校生と大学生は連絡を取り合うことが少なかったようで、結果として、高校生と大学生がそれぞれ別々に調査する結果となった。高校生は、この調査結果を、2019年10月に開催された『アイランダーサミット石垣』高大連携フォーラムにおいて発表し、さらに手話の学習などユニバーサルツーリズムの観点からの学びを継続し、八重山商工の工業系生徒と協働してスロープを製作し、市内のカフェに寄贈している¹¹。協働作業が結果としてうまくいかなかった理由は、後述する。

3.3 オンラインを通しての活動

教育現場では、コロナ禍でオンラインによる授業が導入された。対面では教室と授業時間に縛られるが、オンラインにより少なくとも空間的な縛りがなくなった。この特性は、授業以外にも活用でき、今まで筆者

⁷ さしみ屋を調べる背景には、石垣市地域おこし協力隊、渡邊義弘さん（当時）が、八重山商工生徒と石垣市街地のさしみ屋を調査しまとめていることがある。なお、刺身はいわゆる魚屋ではなく、さしみ屋で販売されている。

⁸ この回の学生参加が少ないのは、インターンシップ終了から約一週間間隔が空いていたため、帰郷した学生が多かった。

⁹ 2019年10月石垣市で行われたイベント。国や地域を超えた参加者が持続性など未来社会について意見交換を行い、それに付随して高校生、大学生のプレゼンが行われた。麗澤大学はドイツ語専攻の学生が日独の環境意識の比較を報告している。

¹⁰ この質問はカフェの経営者には移住者が多いのではないかという仮説による。

¹¹ この活動は後に八重山商工マーケティング部に引き継がれ、2021年「沖縄県生徒商業研究発表大会」において最優秀賞を獲得した。

が訪問して行っていた交流活動の質的転換を図ることができた。ここでは二つの事例を取り上げてみる。

3.3.1 八重山商工・ニセコ高校・麗澤大の交流¹²

山川が研究活動の一環で交流している北海道ニセコ高校にも観光コースがあることから、北海道と沖縄で観光を学ぶ高校生のオンライン交流を企画した。コロナの影響があって一部分散登校の状態ではあったが、2022年2月15日に活動ができた¹³。その目的は、地理的に離れた地域の高校生同士が、日頃の学習活動を知ることで、観光の多様性と可能性を認識し、同時に自分たちの学びの振り返り、今後の学習活動の活性化を図ることである。大学生にとっても地域の多様性をその土地の高校生から知ることは意義深く、さらに大学生のコーディネート能力育成にも寄与すると考えた。

当日の運営は、学校や授業の特性などを双方の高校がそれぞれ25分で紹介し、その後、高校生同士が質問や回答できるようなテーマを、司会役である大学生が投げかける。内容としては、ニセコ高校は、当日の気温や戸外の様子を示し、ニセコから石垣までLCCを使えば1万4千円程度で行ける可能性があること、その後スキー実習の様子が紹介された。一方、八重山商工からは、高校紹介に続いて、戦争体験を聞く平和学習を行ったこと、文化祭（商工祭）にて地域行事である旗頭¹⁴を復興させた取り組みが紹介された。

引き続き、大学生が双方の高校に質問をする形で、高校生同士の交流の機会を設けた。八重山商工の生徒は中国語でプレゼンを行い、一方のニセコ高校からは外国人旅行者が多いこと、ホテルインターンシップがあることも追加して紹介された。そしてニセコと石垣の方言が紹介された。授業終了後も双方の高校生がオンライン交流の感動を語っていたと、両校の先生から寄せられた。のちに提出してもらった高校生の感想に共通するのは、観光といっても地域特性があって内容が違うということに対する驚きである。高校生の活動領域は比較的限定されていること、メディアを介して情報は入っている、自分と同世代、同じ観光の学びをしている生徒が、リアルに何を学んでいるのかを知ることが、このオンライン交流で実現したことになる。

オンライン交流会には、石垣市、ニセコ町に拠点がある新聞社の取材も入り¹⁵、以下に引用する記者のコメントがこの活動の意義を端的に述べている。ニセコ

高校の生徒が「安い行き方を探さなければならない事情を説明していたが、リアルにその場所へ行きたいという気持ちがあればこそそのリサーチだろう。高大交流の熱がイノベーションにつながりそうな予感」¹⁶。

この活動の成果としてあげられることは、第一に、日頃交流の可能性が低い遠隔地の高校同士が、それぞれの観光地と教育について、現地の同世代の生徒を通して学べること、第二に大学生としても、地域の学びの多様性を知ったことである。そして第三として大学生が遠隔地の高校・高校生を仲介する役割を演じることである。高校生にとっては大学という存在を身近に感じることができ、一方、大学生にとっては、地域や観光の学びをする高校の現場感覚を知る重要な機会となっている。

3.4 学術的支援活動

次に、高校生のプレゼンに対し大学生がアンケート協力、コメントをつけるといった、学術的な支援活動を取り上げる。上述してきた活動とは異なるので、幾分詳しく記載していく。八重山商工のマーケティングリサーチ部では、地域の課題発見や解決に向けた取り組み、石垣島の魅力発信等を行っている。メンバーは、観光コースの生徒で構成されており、毎年7月に開催される沖縄県高等学校生徒商業研究発表大会では優秀な成績を取っている。

コロナの拡大により、国内外問わず観光客は減少し、外出自粛や行動制限等により、地元住民でさえも交流する場が少なくなってしまい、地元産業は大きな打撃を受け、それまで活動してきた観光誘致につながるような石垣島の魅力発信は困難となった。そこで、「ウィズコロナ」「アフターコロナ」と段階を見据えながら、石垣島の活性化に向けた取り組みを継続し、「今だからこぞできること」や「これからも続けられること」という視点で「石垣島へ観光以外でも来島してもらえるような魅力の発信」というテーマを設定した。「石垣島×仕事」や「石垣島×キャンパスライフ」等の日常を石垣島で過ごせる環境を提案することで、「ウィズコロナ」でも石垣島への来島を促せるのではないかと考えにいたる。

近年、大学では、コロナの影響によりオンライン形式の授業の増加や、感染予防対策を徹底しながら、対面授業とオンライン授業のハイブリット型で実施する大学も増えている。そこで、「石垣島×キャンパスラ

¹² 北海道ニセコ高校は緑地観光科生徒が中谷知記教諭の指導のもと参加した。

¹³ 2021年には、八重山商工、ニセコ高校、北海道立枝幸高校と麗澤の4拠点での交流を企画したが、コロナによる休校措置があり、ニセコ高校と枝幸高校で交流を開催した。

¹⁴ 2021年に行われた商工祭では20年ぶりに商工旗頭を立てた。

¹⁵ 八重山毎日新聞（2022年2月16日、2月22日）北海道新聞小樽後志紙面（3月1日）にて紹介された。

¹⁶ 八重山毎日新聞の不連続線（松田良孝記者）より。https://www.y-mainichi.co.jp/news/38226/（2022年9月1日確認）

イフ」というテーマで、もし大学がオンライン授業可能であれば、ウィズコロナでも石垣島で過ごしながらか大学生活を送っていきけるのではないかとという仮説をたてた。ここで、麗澤大学をはじめとする大学生がフォームを利用したアンケートに回答した。その結果をまとめた「石垣島 de キャンパスライフ」のプレゼンに、学生もオンラインで参加し、講評するという活動である。プレゼンでは、石垣島に住むことになったらどのようなキャンパスライフがおくれるかをイメージした提案をまとめた。石垣島にある多様な文化や自然を日々体験できるだけでなく、最近ではコーヒースタンドやコワーキングスペースも増加しており、ますますテレワークやオンライン授業のできる環境が整ってきている。また、大学生が石垣島に来島することで、石垣島の課題である若年層の雇用問題の解決や高校生の大学進学のかきかけ作りにつながる可能性があること、大学生の存在が石垣島の励みになり、活性化につながることを示された。プレゼン後は、「スライドが分かりやすくよかった」「石垣島で過ごすイメージができた」「ぜひ石垣島に過ごしながらか大学生活を送ってみたい」等の感想や「過ごす上で実際にかかる費用も知りたい」という意見も挙がった。また、アンケート調査では、「もし、大学がオンライン授業可能になればどのような場所で過ごしてみたいですか」という質問に対して、44%が別の地域や場所を変えて受講したいという回答があった。さらに、「具体的にどのような場所で過ごしたいか」という調査項目には、「海沿いのカフェ」や「のどかな田舎」「人が少ない場所」「のんびりできるところ」「旅行しながらホテル住まい」等、静かな落ち着いた場所でオンライン授業を受けたいという回答が多く挙がった。「石垣島に住みながらかオンライン授業を受けたいと思いますか」の質問には、70%が「はい」と回答したが、「その際の不安に感じることに」について回答を見ると、「台風被害」や「金銭面」「知り合いがいない」「環境や気候」「ネット環境」「大学の友達が作りづらい」等の不安要素も多くあがった。

成果としては、オンラインではあるが、コロナ禍で高校生が大学生と交流を持つことができ、研究内容について生の声でアドバイスをもらえたことやアンケート調査で多くの学生の協力を得られたことである。課題としては、この提案の実現にはさらに細かなシミュレーション、例えば石垣島での生活費用などの調査が必要である事もわかった。

4. 高大連携活動の課題と今後の展望

前章にて、これまでの麗澤大学と八重山商工の連携活動を具体的に示してきた。ここでは、交流・連携活動の課題を探りつつ、今後の交流活動への展望を示していきたい。

1) 交流・連携活動日程について

前章で示したように、活動が4段階で時系列的に発展してきたとはいえ、活動そのものは、長くても一日単位になっている。そもそも高校の授業は検定教科書を使用する授業カリキュラムがあり、その中で関連する事項を大学と連携する。八重山商工の観光コースでは、麗澤大学以外にも専門性の高い出張講義や実習が行われていること、学期ごとの試験やその他の学校行事が立て込むことから、交流活動の回数は限られてくる。事情は大学生にとっても同様で、授業期間内での石垣への渡航は、他の授業の欠席を強いることになる。さらに対面で交流を行うとすれば、石垣までの旅費の負担が生じる。高校、大学双方の制約を考えると、結果的にインターンシップ活動と連動して2～3月、8～9月に活動することに落ち着いている。また、学外での活動となる場合には、気候的な配慮も必要になり、高温と台風を避け、2月の実施が好ましいことになる。さらにオンラインで活動する場合でも、授業時間の制約から昼休みや、高校、大学の休暇期間に行うことになる。この時間をいかに確保するかが課題である。

2) 活動内容について

今までの活動から言えることは、大学、高校の担当教員が打ち合わせを行う中で、交流連携のミッションを明確化しておくことが重要である。これまでの交流・連携活動においては、大学での学びを身近に感じるといった交流的なミッションから協働に展開してきた。アドホックな関係からフィールドワークやオンライン活動になると、大学生の日常の学びがキーになってくる。そのため、インターンシップ参加者が関与する場合には、現地派遣前に地域事情のレクチャーを実施したり、観光を学んでいる山川のゼミ生が参加したりすることになった。

具体的な活動内容に関しては、冒頭に書いた高大連携に関する文部科学省の文書などでも示されているように、学びの意義を深めることが求められる。ただ、観光に関しては、地元の方が情報に詳しいこともあるので、観光資源の再発見のような視点で、高校生の認識を新たにするアドバイスが有益である。大学生にとっては、ネット情報ではなく発信者の顔が見える具体的な事例の学びという点で意義が出てくる。

3) 交流・連携の準備について

高校生、大学生が対面でもオンラインでも、交流するのは時間にして数十分から一日である。しかし担当する教員は、当然のこと比較的長い期間をかけて準備する。その準備があつてこそ、短い時間の交流が有意義なものとなることは言うまでもない。双方の教員ともに授業などの業務があるため、実はこの打ち合わせを行うことが第1のハードルともいえる。

どのような内容で交流連携を行うにしても、日常の授業や活動が関係してくる。特にフィールドワークの場合は、事前の準備、活動で得られた内容の整理が必要になってくる。高校側では、ある授業単元、前後の授業との関わりでフィールドワークを設定することになるので、フィールドワーク全体に関して、活動する大学生も理解し、大学生の役割を明確化していくことが有益である。

そして打ち合わせしておくのは教員間だけではない。訪問者の立場で、かつ高校生をサポートする大学生の方に、活動の意義を理解させておく必要がある。観光地への訪問なので、学生も観光客モードになりがちなので、特にこの点が重要になる。積極的にチームビルディングしていくこと、交流の点火方法などを事前に学習させ、可能であればその方法を練習しておくのが好ましい。

ここで、カフェマップを作る活動で生じた問題を示そう。この活動に関わった大学生は、石垣訪問経験はあるものの、高校生との接点はなく、またコロナ以前でzoomを使用する環境にもなっていなかったことから、山川が仲介して、高校生、大学生ともに別々に活動をして、大学生が訪問時に対面交流を行う予定であった。しかし、大学生の訪問時点で、高校は夏休みに入っていたこと、仲介の山川が同行していなかったことなどもあり、結果としてカフェの調査は別々になったままであった。高校生の方は、その後も授業できちんとカフェをテーマに授業を行っているのに対し、大学生の方は夏の短期活動となってしまった¹⁷。このことから見えてくるのは、学生活動の設計を明確化し、学生のモチベーションを継続させることである。

双方の環境を理解しておくことも必要で、山川の場合、八重山商工を年に2～3回は訪問することがあるため、高校側の事情を理解はしているが、それでも高校生の雰囲気、担当教員やその他の教職員との面識の有無は、活動の円滑性に関係してくる。一度は対面の打ち合わせをしておくことが好ましいと考える。なお、

山川が2014年に始めて訪問して以来、観光コースを担当する教員は、現在の教諭で4人目である。離島であることから教員の異動が定期的にあるため、頻繁に連絡を取り合うことで連携活動の継続性が担保されていく。一方、麗澤大学側でも、現時点で主体的に活動しているのは山川だけで、組織的な連携には至っていない。

4) オンライン活動について

オンラインによる交流連携は、今後の活動のありかたを替えていく可能性がある。ただ、今は移行期かもしれないが、オンライン環境を整える必要がある。大学生はオンラインに慣れていて、zoomを立ち上げれば個人ごとに入ってくるが、高校は教室で全員が入り込んで一つのアカウントを利用することが多く、高校生が発言する場合に、カメラ近くへ出て行く必要がある、そしてやりとりのタイミングが難しいこともあり、オンライン方式を行う場合、事前の動作確認を綿密に行うことが、効率のいい交流につながる。

さて、今後の展望として、交流・連携活動の内容的な可能性を示しておきたい。八重山商工やニセコ高校の観光コースの場合、実習が地元に関連することが多い。そこで高校生の活動から地域に根差した事象の学びを得ることができる。本論では取り上げていないが、八重山商工で行っている戦争マラリアなどの平和学習などを連携に入れること、オンラインで行った調査を大学の通常の授業の中で紹介してもらうことなどは可能である。さらに、八重山商工の中国語の授業で、麗澤大学の留学生がサポートするという交流もあり得る。

このほか、特記すべき新たな試みは、2拠点ではなく3拠点活動があげられる。大学のネットワークを活用すれば、国外の拠点との同時オンライン活動も可能となる¹⁸。そしてオンライン活動を継続すれば、調査や活動を整理して次のオンライン活動に報告するような連携活動の継続化の取り組みもできる。大学が有する研究や地域活動実績、国外提携校を活用していけば、高大連携はさらなる広がりを持つことができよう。

5. おわりに

本稿では、高大連携協定のある沖縄県立八重山商工高校と麗澤大学との間でなされた、5年間の連携活動を整理してきた。具体的な活動内容を見ればわかると

¹⁷ 大学生の活動では、インスタを立ち上げるという高校生とは違った活動成果があつたが、高校生との情報共有は少ないまま終了してしまった。

¹⁸ 大学間では、麗澤大学とタイのパヤオ大学、ナレーズワン大学とオンラインによる協働を実施したことがある。奥村匡史・金谷俊暁・ピラダー トー
ンチャイヤブーム・山川和彦 (2021)「オンラインによるタイ日学生異文化交流—実施報告と今後の可能性」『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究
論集2』p.23-35.

おり、高大双方の教員の連絡ができ、信頼関係の構築があつてこそその活動である。

八重山商工の観光コースは、カリキュラムそのものに実習的な要素があり、授業時間の調整が可能であつたこと、当然その背景として高校の先生方¹⁹、管理者の理解があることは言うまでもない。また、交流は、インターンシップで石垣市を訪問中の大学生が対面で行うことに疑いを持たずにはじめた。オンライン環境に慣れてきた世代が高校生、大学生ともに増える中で、今後の交流がいかなる形で行われるべきか、交流そのものの理想型がいかなるものか、高大双方の話し合いが今後も必要である。

執筆分担：3.4 は城間が、その他は山川が主として執筆し、双方で全体の確認をした。

6. 参考文献

川合 宏之（2018）我が国における高大連携の変遷と今後の展望—より自主性を尊重する教育へ—「経済教育」37 卷 37 号 p20-26.

山川和彦（2018）観光地におけるインターンシップの意義に関する考察 麗澤大学紀要 101. p77-81.

¹⁹ 連携活動中に関わった校長、教諭を列記しておく（敬称略） 学校長：真栄田義功、新城英人、波平孝夫、仲山久美子。観光コース担当教員：宮里靖乃・山城学・玉城弘明・宜保安貴・大城貴宏・與那覇梢、商業科主任：金城寛史・末吉昇一。